

本書は、水俣病記念講演会をはじめ水俣フォーラムの催しにおいてなされた六〇〇を超える講演の中から選択した一〇講演をもとに、巻頭の詞章と解説を付して構成したものである。

花を奉る

石牟礼道子

春風萌もすといえども われら人類の劫塵ごうじんいまや累かさなりて

三界さんがいいわん方なく昏くらし

まなこを沈めてわずかに日々を忍ぶに なにに誘いざなわるるにや

虚空はるかに一連の花

まさに咲ひらかんとするを聴く

ひとひらの花卉 彼方に身じろぐを まぼろしの如くに視みれば

常世とこよなる仄明ほのあかりを 花その懐ふところに抱けり

常世の仄明りとは あかつきの蓮沼はすぬまにゆるる蕾つぼみのごとくして

世々よよの悲願をあらわせり

かの一輪を拝受して 寄る辺なき今日こんにちの魂たまに奉たてまつらんとす

花や何 ひとそれぞれの涙のしづくに洗われて咲きいずるなり

花やまた何

亡しのき人を偲しのぶよすがを探さんとするに 声に出いせぬ胸底きょうていの想いあり

そをとりて花となし　み灯りにせんとや願う

灯らんとして消ゆる言の葉といえども

いづれ冥途の風の中にて

おのおのひとりゆくときの花あかりなるを

この世を有縁といい無縁ともいう　その境界にありて

ただ夢のごとくなるも花

かえりみれば　まなうらにあるものたちの御形

かりそめの姿なれどもおろそかならず

ゆえにわれらこの空しきを礼拝す　然して空しとは云わず

現世はいよいよ地獄とやいわん　虚無とやいわん

ただ滅亡の世せまるを待つのみか

ここにおいて　われらなお

地上にひらく　一輪の花の力を念じて合掌す

萌す　起ころうとする気配がある

劫塵　この世を埋めるほどのちり

累なる　累々と重なる

三界　命あるものが生きる全世界

昏し　日が暮れたように暗い

常世なる　水久に変わらない

世々　過去・現在・未来の代々

よすが　ゆかり、頼り、寄る辺

水俣へ——受け継いで語る ● 目次

石牟礼道子 花を奉る

日高六郎 水俣——南北問題と環境問題の交わるところ 1

鶴見俊輔 近代日本——水俣病への道 13

池澤夏樹 水俣病と幸福の定義 27

井上ひさし コメと水俣病——戦後日本農政の影 49

網野善彦 軽視され続けた海の民——日本社会史から 67

柳田邦男 水俣病が求めること——二・五人称の想像力 85

高橋源一郎

三・一一と水俣病

109

中村桂子

水俣から学び生きものを愛づる生命誌へ

133

若松英輔

語らざるものたちの遺言——石牟礼道子と水俣病の叡智

153

奥田愛基

呪いたい社会でも命を祝福したいから

175

実川悠太

解説にかえて

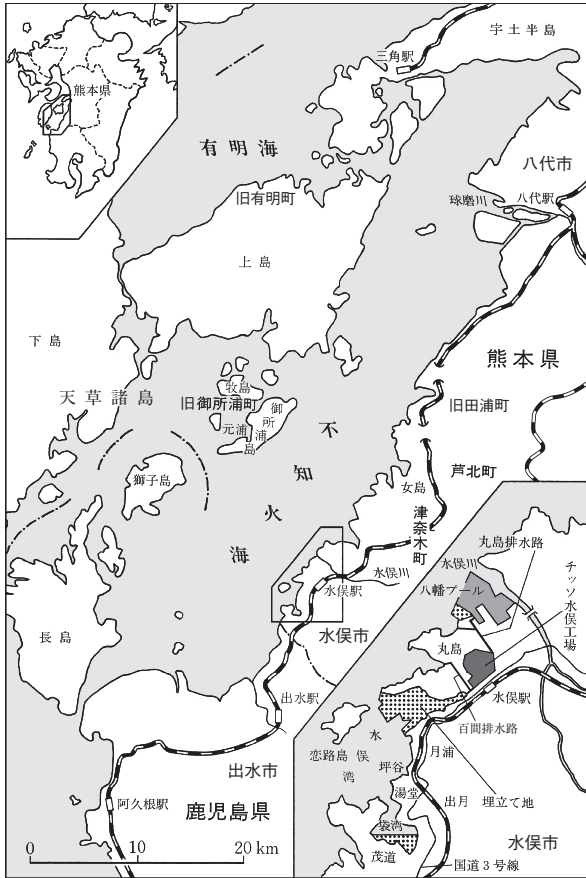
193

初出一覧

203

装丁 市川敏明・市川美野里

カバー・扉図版(木彫) 中澤安奈



不知火海沿岸図と水俣市概要図

日高六郎

水俣——南北問題と環境問題の交わるところ

私ちよつと膝を痛めておりますので、腰かけてお話しさせていただきます。私はこの秋（一九九六年）開催される予定の水俣・東京展のお手伝いを少しさせていただいております。まあそういうことで皆さんに何かお話しするように依頼されたのですけれども、今朝（四月二九日）の新聞などで「水俣病決着か」「政治決着」というような見出しを見ますと、非常に感慨無量のところがあります。しかし、本当の決着には至っておりません。

「水俣・東京展」とここに書かれております。水俣の次にナカグロ（・）がございます。水俣・東京展とはいったい何なのか。簡単に言いますと「水俣病事件について東京で開催される展覧会」という意味であろうと思います。しかし私は、このナカグロをじつと見ていますとまったく別のことを考えたくありません。展示されるのは水俣だけであろうか。東京が同時に展示されるのではなからうかと。

水俣の患者さんたちの苦難の四〇年。こうまでも長引き、こうまでも被害が拡大されたその責任はいったいどこにあったか。言うまでもなく東京にありました。東京には、行政、立法、司法の大きな力が集中しております。もちろん財界の中心地でもあります。官僚あるい

は学者と称する人たち、あるいはマスコミ、あるいは無責任なことを言う評論家たち、そういう大きな力がチツソの後ろ盾にありました。それがあつたために、水俣の長い長い四〇年の苦難があつた。

展示物はもちろん水俣病関係が中心になりました。しかし展示されているのは、あるいは展示されていない部分で水俣病事件の中心となつていっているものは、まさにナカグロの後の「東京」だったのではないか。この水俣と東京の間の緊張関係、対抗関係、あるいは癒着関係、それらのものがこの展覧会で展示されるのではなからうか、そういう気がするわけです。

土本典昭さんが水俣をずっと遍歴されて、五〇〇人余りの遺影を収集されてこの展覧会で初めて公開される。亡くなった方々の遺影ですから、その色彩は黒い色、悲しみの黒です。しかしその黒い色の後ろに、まがまがしい黒い色が密着して存在しているのではないか。そういう意味の水俣・東京展ではなからうか、と思うのです。

一九五六年五月一日に水俣の漁村で原因不明の病人の発生が報告された。それで明後日の五月一日で発生から四〇年になります。私は四〇年という年にこだわりはありません。時間はずっと同じように流れている。二〇世紀とか二一世紀とかいっても、そこに何か大きなけじめが現れるはずはない。しかし、とにかく四〇年という時間が流れたわけです。私が水俣

の問題に直接関係を持ちましたのは、熊本県議会で県会議員のいわゆるニセ患者発言問題があつて、それに憤つた患者が暴行を加えたとして捕らえられたときです。そのようなことが起こつたので、東京の研究者などで調査団を作つて来ていただけでないか、というお電話が石牟礼道子さんからありまして、すぐに参りました。しかしこの水俣病の問題を初めて知りましたのは実は非常に早いです。(四〇年前の)五月一日の何日後か何十日後に私は知つたんです。

私が東京大学の助手をしていました戦争中に文学部社会学科に入つていた一人の学生がいました。水俣出身で谷川雁たにかがわんといいます。名前をご存知の方もあろうかと思ひます。私は戦後の「すごい男」というと谷川雁を真っ先に思い出しますが、その彼から手紙が来たんです、一九五六年に。その中に何が書いてあつたかというところ、水俣で原因不明の病人が続出した、そういう事件が起こつた。(その年の)ある日、谷川眼科医院、つまり谷川雁のお父さんが、チツソの病院(水俣工場付属病院)の病院長である細川一さんほそかわはじめと碁を打つていた。そこへ連絡が入つたんです。すぐに細川さんは谷川家を出て行かれた。たまたま家に帰つていた谷川雁はそのあと細川先生にあてて一冊の本を送つたというんです。そういうことが手紙に書いて

あった。何を送ったかというといブセンの『民衆の敵』という戯曲を送ったと。いや、本当にすごいと思いました。その瞬間にイブセンの『民衆の敵』を細川先生に進呈する。イブセンは一八七〇年代に『人形の家』を書いて、その後すぐに『民衆の敵』を書くんです。

どういう筋かといいますと、ノルウェーのある小さな町で突如として温泉が噴き出るんです。町の人たちは大喜びで「これでこの町は繁栄する、繁盛する」と。旅館も造ろう。療養所も造ろう。ホテルも造ろう。いろいろ食堂も造ろう。それでこの町は繁盛する。ところが温泉客に病人が続出している。そこで町に住む医者が温泉地の水を大学に送って検査してもらうと、水に無数のばい菌が入っていて身体に有害であるとわかった。医師はこの町の集會に出て、温泉は使えない、使うなら移設しなければならぬと言ふ。しかし町の人は絶対に許せない、というわけです。それでついにその医者の家族を排撃して、町から追放しようとする。そういう劇です。

谷川雁はですよ、原因がどこにあるかもうだいたい睨んでいる。細川先生、覚悟を決めてください、そういうメッセージですね。細川先生は病院の中でいろんな実験をされた。猫の実験もされた。しかしながらチツツはそれを発表することを許さなかつたわけですね。そして細川先生は水俣を離れた後、ガンになられて亡くなるんですけれども、その直前に患者さん

のために、ある種の遺言のような形で(有名な猫四〇〇号実験を含む)その当時の実情、実態を裁判所で証言なさる。最後に細川さんは民衆の敵になるわけです。(水俣市民という)カック付きの「民衆」、カック付きの「敵」ですよ。しかし「民衆の敵」になる。

私が石牟礼道子さんのお宅に泊めていただいたとき、これはもう『苦海浄土』(講談社、一九六九年)が発行された後だと思っただけでも、石牟礼さんがしみじみこういうことを言われた。私はどこか出ていって水俣に帰るときは、夜おそーい汽車で帰ってくる。水俣の人たち、水俣の市民は『苦海浄土』を書いた自分に対して疎ましい気持ちで見ている。水俣の悪口を言ってる、悪口を書いている。自分は昼間帰っているんな人たちに顔を合わせるのにつらいから、夜一番最後の汽車で帰ると。その頃、すでに東京では、『苦海浄土』が本当に評判になりました若者たちも一生懸命読んでいたわけです。

つまり、いわゆる「力」を持っているような人々の東京と、それから『苦海浄土』を一生懸命読んで水俣に出かけていくような若者たちと、両方あるわけです。水俣と東京の対抗関係と、何と言いますか、協力の関係と両方があるわけです。しかしなぜ石牟礼さんが夜遅く汽車でお帰りになるのか。石牟礼さんもその時点ではカック付きの「民衆」のカック付きの「敵」なんです。そういう構造が日本にあるわけです。だから水俣の中に日本があるんです。

谷川雁は雑誌『サークル村』というのを、水俣病の患者が出た後すぐの一九五八年に出します。その中に「村の中に日本がある」って書いている。サークル村の中に日本がある。

日本の中に村がある、これは誰でも考えます。しかしそうではなく、村の中に日本があるんです。村の中をじーっと掘り下げていけば、そこに日本の縮図が現れてくる。こういうことだと思えます。

「事柄はすべて個別的、具体的に語るのが良い。一般的、抽象的に語ってはならない」ということを言ったサルトルという人がいます。しかし本当に事柄を個別的、具体的に語るこ
とができるのは原田正純先生はらだ まさひとであり、石牟礼さんです。私にはそういう力はないのです。そこで大変一般的なお話になって申し訳ないんですけども、水俣の問題というのは、これは言うまでもないことですが、人間が自然を破壊していけば人間が破壊されるということです。自然が破壊されていけば人間はどうなるのかという問題ですよね。それは環境問題と言っていいでしょう。日本にはいま、たくさん問題があります。ありますけれども、いま大きな問題が二つあると思うんです。一つは南北問題です。世界が抱えていると言ったほうがいいかもわからない。もう一つは環境問題です。南北問題というのは、地球というより世界史

の中の問題です。世界の問題。環境問題というのは地球の問題です。世界の問題と地球の問題。二一世紀が絶対に解決しなければならぬ問題として、この二つがあるんです。

しかし考えてみますと、相互に交錯し合っているところがある。南北問題というのは、あの意味では東京と水俣の関係でもあるわけです。ですから南北問題をただ世界の問題として考えるのではなくて、これも東京と水俣の問題だというふうに考えることもできる。東西問題がなくなったから南北問題が浮上したということではない。世界的に言えば、一五世紀、一六世紀頃から南北問題が始まっているわけです。それからソヴィエトができて核兵器というものがあって二大超大国ができて、そこで東西問題が出てきたわけで、東西問題の方がはるかに歴史的には新しい。南北問題が世界史の骨格なんです。その南北問題が解決されていない、ということが一つある。もう一つは、これは最近に始まったことで、人間が自然を破壊する能力を持ちだしてきているということです。

これに対して、私たちは一体どういうふうに考えたらいいか。水俣病問題というのは、高度経済成長が始まる準備期に起こったんです。いまや（一九九六年）高度経済成長の末期にわれわれは生きているわけです。そうしますとね、その高度経済成長というものをどういうふうに理解していくのか。ガバン・マコーマックというオーストラリア国立大学の教授で、

いま立命館大学の客員教授で来ている人が、最近一冊の厚い本を書かれた。それは、『日本の繁栄の空しさ』（松居弘道・松村博訳『空虚な楽園——戦後日本の再検討』みすず書房、一九九八年）という題の本です。それを読みましたら、最後のところで私、非常に惹かれる文章に出会ったんです。マコーマックさんは長崎に行っていた。そのときに岐阜の商業高等学校の女子学生たちもいて、その女子学生が彼のところに来て一枚のカードを渡した。そこになんて書かれていたかといいますと、英語で「すべての人々は幸福になりたい。だから、私は戦争を拒否する。私は平和を愛する。私たちの力で戦争をやめさせよう。日本は平和を愛する国である。どこか世界の中で小さな戦争が起こっているらしいけれども私はよくわからない。しかしとにかく戦争はやめさせなければいけない。そして世界を平和にしたい」と。そういうカードだった。女子学生たちには二つ目的があつたと思うんです。一つは英語の会話をしたい。もう一つはそのカードを渡したい。マコーマックさんは日本語のベテランですけれども、日本語を使うことは失礼だと思ってしばし考えた。そのときにマコーマックさんが考えた言葉、それはこういう言葉なんです。「世界の平和のために、どうやれば日本あるいはその他富める国々のあの際限のない消費欲望、これを封じ込めることができるだろうか」。そういう文章を書いてカードを返そうと思った。しかしそのことが果たしてどういうふうに理解される

か心配だったので、非常に平凡に「私も平和を愛する」と書いて返したというんです。

つまり経済成長準備期には水俣の漁民の方々は、際限のない消費欲望に駆られて物を買集めたりなんかしていなかった。いまや際限のない欲望に駆られているのはわれわれなんです。政府にもよろしくないことをした人たちがたくさんいる。すべて東京にですね、そういう機関がたくさんある。しかしながら、いまや自然破壊の責任はわれわれ民衆にもかかっているわけです。われわれ民衆が本当に際限のない消費欲望から解放されることができるかどうか。際限のない消費欲望、これこそがやっぱり自然破壊の原因になっているわけです。そしてそれは南北問題にも繋がっている。そういうことがいまや民衆の、カッコ付きでない民衆の肩にかかっているわけです。水俣・東京展で私たちは、自分たちの生活をどういうふうにしていったらいいのかということ、ぜひ引き出したいと思うんです。

正直に言って私はダメ人間なんです。本当にダメな人間で、この会場にも二〇パーセントくらいはダメ人間がいらっしやるんじゃないかと思いますが(笑)、一時の衝動でつまらないものを色々買ったりしています。クーラーもつけますしね。しかしやっぱりダメ人間が力を合わせて何とかしないといけない時代に入ってきているのではないか。私はダメ人間ですか